

ベルリン市の基礎学校における「PISA スーツケース」の 活用状況と日本版開発の可能性

Research on the Practical Use of “PISA Suitcase” in the Berliner Grundschule
and Consideration of Development of a Japanese Edition

水戸部 修治*
MITOBE Shuji

Abstract

“PISA Suitcase” is a teaching material unit for Grundschule in Berlin, in the Republic of Germany to develop children’s reading literacy.

The PISA2003 showed that the reading literacy level of Japanese schoolchildren leaves much to be desired. I think it will be of great use to solve the problem if we develop the Japanese version of “PISA Suitcase”. So I have investigated into the practical use of “PISA Suitcase” in the Berliner Grundschule, and I have clarified the contents of “Praxisbox Lesen”, the name of “PISA Suitcase” on the market.

Through this research, I found out that “PISA Suitcase” gives a broader meaning to the definition of “reading literacy” than the traditional one. For example, it contains the ability to read books of their own choosing, to shape their ideas about them, to express or exchange opinions in addition to the ability to interpret. I also found out that “PISA Suitcase” shows reading literacy as visible tools.

“PISA Suitcase” was developed as a counter measure against the decline of reading literacy among children known as “PISA-Shock” in PISA2000 and is still helping to improve German language classes in Berlin. To this day, it is developed at Landesinstitut für Schule und Medien Berlin-Brandenburg and is used by every Grundschule in Berlin City.

“PISA Suitcase” and the Course of Study for the Japanese language education in Japan have a lot in common. Both of them aim at raising schoolchildren’s reading literacy level through a variety of language activities. They place a special emphasis on the process of learning when they read books of their own choosing, shape their ideas, express their opinions or exchange them for the improvement of schoolchildren’s reading literacy.

I believe these are the key points in developing the Japanese version of “PISA Suitcase.” I find it necessary to compile guidebooks for teachers, to develop materials and to make model lesson plans.

*国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部研究開発課・教育課程調査官

1 はじめに

ドイツは2000年のPISA読解力調査において21位となり、日本より早く読解力低下という現状に直面した。この「PISAショック」以降、ドイツ連邦・各州・大学・研究機関・図書館そして初等中等教育機関において読解力向上に関する様々な取組が行われている。

その中でも注目に値するのが、ベルリン州立学校・メディア研究所（Berliner Landesinstitut fuer Schule und Medien）⁽¹⁾が開発した、基礎学校（Grundschule）における読解力向上の教育実践のための教材集「PISAスーツケース」（Pisa Koffer）である。開発当初、研究所員がスーツケースに入れて各学校に貸し出しをしていたことからこのような名前が付けられた。その後、読み方実践ボックス（Praxisbox Lesen）という名称で市販されている。

筆者は、この「PISAスーツケース」の特徴を生かした日本版の読解力向上教材の開発を目指して、ベルリンにおける開発の経緯と、その基本的な構造及び特徴について報告した⁽²⁾。そこでは、「PISAスーツケース」がもつ基本的な特徴を解明し日本版の試作に着手することができた。しかし、日本版開発のためにはより詳細な特徴の分析が必要である。また、未解明のままとなっている、ベルリン市の基礎学校における実際の活用状況の把握も課題として残された。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

本研究は、全体構想としては、PISA読解力調査の結果が示すように喫緊の課題である読解力向上のため、「PISAスーツケース」の特徴を生かしつつ、我が国の教育課程に適合した、小学校国語科の授業改善に生きる教材集、日本版「PISAスーツケース」を開発することを目的とする。このうち本論においては、「PISAスーツケース」の特徴をより詳細に分析するとともに、現在の開発状況及びベルリン市の基礎学校における活用状況について考察し、日本版の開発に向けて対応が必要な課題を整理することを目的とする。

(2) 研究の方法

2007年11月30日から同年12月8日にかけて、ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所及びベルリン市内の基礎学校2校を訪問し、聞き取り調査を行った。基礎学校2校では、読み方実践ボックスを活用した授業も参観した⁽³⁾。

また「PISAスーツケース」の市販タイプである読み方実践ボックスの特徴を解明するため、上記現地調査の際に読み方実践ボックス1式を入手し、日本に持ち帰って翻訳した⁽⁴⁾。これらをもとに、我が国の新小学校学習指導要領・国語との関連について考察する。

3 読み方実践ボックスの概要

読み方実践ボックスとは、基礎学校向けの読解力向上のための教材集「PISAスーツケース」の製品名である。ドイツ連邦の教材販売会社、Schroedel社から市販されている⁽⁵⁾。

入門編及び8つの下位項目で構成されており、その内容は、以下の通りである。

入門編 (Einführung)

- 1 読むことへの関心 (Leseinteresse)
- 2 読解の演習 (Leseübungen)
- 3 読む手順 (Lesestrategien)
- 4 読解課題に対応して読む (Leseaufgaben)

- 5 読むプロセス (Leseprozesse)
- 6 読む文化 (Lesekultur)
- 7 保護者との連携 (Eltern)
- 8 自己評価シートで診断 (Diagnose)

これらは、2000年の「PISA ショック」を受けてベルリン州立学校・メディア研究所が開発・教材化したものであり、我が国の国語科の授業改善にも資する内容を多くもつと考えられる。

筆者は、前述の下位項目に関する基礎的な検討を行った⁽⁶⁾。この考察を踏まえ、我が国の小学校国語科学習指導の改善に資すると考えられるものに焦点を絞り、その詳細を明らかにする。具体的には、「読解についての意識改革に寄与するもの」「読む能力を育成するための授業づくりへのヒントを与えるもの」という観点からみて、特に有効であると考えられる入門編及び下位項目を取り上げて解説していきたい。

(1) 入門編 (Einführung) の内容とその役割

入門編においては、次のように教師向けの説明がなされている。

資料1 「読み方実践ボックス」入門編の内容

1. 読解とは、意味が構築されてできあがるものである。

テキストを読んだり理解したりすることは、読者の知識を活用しながら進む建設的な過程であるとされています。テキストがもつ情報を得る過程 (ボトムアップ) と知識を活かして解釈する過程 (トップダウン) が同時に進行するのです。両プロセスは常に交互に進行していきます。この意味で「読解」は、読者のもつ知識や読む目的に応じて解釈していく「トップダウン」型の過程であると同時に、逆に、テキスト (文字、単語、文など…) から知識を得ていく「ボトムアップ」型のプロセスでもあります。要するに、読者はもっている知識や読む目的に応じて、テキストの意味を再構築するというわけです。(中略) ですから、書かれた内容を解読して「意味を受け取る」だけの読者という従来の解釈とは決別する必要があります。そうではなく、読者は文章を読む際に自ら「文章に意味 (意義) を与える」存在であると認識すべきです。理解という行為は、読者による構築行為に他なりません。(以下略)



図1：入門編の図解資料

入門編は、「読解」という行為の概念を教師向けに丁寧に解説している点に特徴がある。図1はその図解資料の一つで、OHPシートとして読み方実践ボックスに収められている。

資料1においては、とりわけ「書かれた内容を解読して『意味を受け取る』だけの読者という従来の解釈とは決別する必要」があることを明確に示している点に着目したい。

我が国においても、平成10年版学習指導要領の改訂の基本方針として、「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」ることが提言された⁽⁷⁾。しかし、依然として「読むこと」の学習指導は、文章の内容を詳細に読み取ることに陥りがちである。資料1のような解説は我が国においても、「読解」のとらえ方を転換していく手立てとして有効であろう。

(2) 「読むことへの関心」(Leseinteresse) の内容とその役割

読み方実践ボックスの第1項目である「読むことへの関心」では、子どもたちの読むことへの関心の低さを指摘するとともに、子どもが自分自身の読書への関心を振り返ったり、教師や両親などが子どもの読書への関心を把握したりする教材を具体的に提示している。

資料2-1 「読むことへの関心」の内容

読むことへの関心 Leseinteresse

読解力と読むことへの関心との相関関係は立証されています。2000年のPISA調査では、素晴らしい読解力を示した国では、読むことに対する関心の低い生徒が少ないことが分かりました。

ドイツの15歳では、PISA調査で読むことに全く楽しみを感じないと答えた生徒が42%で、これを超える国はありません。IGLU研究では、4年生を対象にしたアンケートでこれよりはよい状況ですが、それでも18%の児童が自ら進んで読書をするのではないと答えています。

PISA調査ではさらに憂慮すべき所見が見られました。ドイツの教師の大半が、生徒の読書に対する関心の低さに対して何の情報も与えることができないという点です。

「読むことへの関心」の教材は、基礎学校のスタート時からどうすれば子どもたちに個人的な読書経験に対する自己評価や他者との比較の機会を与えることができるのかを示しています。大切なのは、子どもたちが学校でも家庭でも読書に対する関心を意識化するようにすることです。

(以下略)

資料2-2 読書への関心を自己評価するシート

読書の人相書き Lesesteckbrief

私のお気に入りの書物は、

・・・『ニック・ナーゼ』

この種類の本を読むのが私は好きです。

・・・「探偵ものの書物」

一番心地良く落ち着いて本を読むことが出来る場所は・・・「私のベッド」

書物で知識を得ているテーマは

・・・「動物に関して」

学校で読んだり、課題として扱ったりして欲しいテーマは・・・「こうもり」



図2：子ども向けの自己評価シート

資料2-2及び図2にも見られるように、子ども自身が自分の読書へのかかわり方を具体的に振り返るとともに、視覚的にもそれがとらえやすいようにしている点に特徴がある。子どもの実態が把握できれば、様々な対応策もより効果的に展開できるであろう。我が国においても、ここで示されたような具体的な手立てを工夫することは有効であると考えられる。

(3) 「読む手順」(Lesestrategien) の内容とその役割

読み方実践ボックスの第3項目である「読む手順」では、子どもが単一のテキストを読む際の手

順を7つの段階で示している。子どもが一人で読む場合の手順と、読書会として共同で読む場合の手順が提示している。

資料3-1 「読む手順」の内容

読書案内人 (LESELOTSE) (一人用)						
1 読む前・・・テキストには見出しがあり、時には絵もあります。それらを通して、「アイデア」や「推測」や「思いつき」をもちます。それらに関して5つの言葉をメモしましょう。単語を音読してみましょう。						
2 読む・・・テキストをゆっくり正確に読みましょう。あなたが分からない箇所や言葉はありますか？鉛筆でそれらに下線をひきましょう。						
3 明らかにする・・・あなたが分からなかった箇所を明らかにしましょう。 (以下、項目のみ示す。)						
4 分ける	5 印を付ける	6 まとめる	7 評価する			

資料3-1は、単一のテキストを読む行為を、子ども自身が行えるよう導く点に特徴がある。子どもの読解力は、それを子ども自身が活用できて初めて確かな力として身に付いたと言える。このように、単一のテキストを読むための基本的なプロセスを明示し、繰り返し活用して読むことで、子どもは読むことを、見通しをもって行うことができるようになると考えられる。

この資料は同時に、国語科の学習指導スタイルについても有益な示唆を与える。すなわち、学級の子どもたちが共通テキストを教師の一斉指導の下に解釈するだけではなく、子ども自身がテキストを選択し、独力で読んでいくというスタイルをも可能にすると考えられる。

(4) 「読むプロセス」(Leseprozesse) の内容とその役割

「読むプロセス」の項目には、具体的な読書活動のアイデアが提示されている。以下の①と②は、ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所で開発を担当した研究員に聞き取った内容である⁽⁸⁾。また、他のツールに比べて複雑な構造をもつ「読書ロール」については、具体的な内容を分析するとともに、その作り方や課題例を③に示した。④は、現在も進められている開発の状況について聞き取った内容である。

①「読書の小箱」⁽⁹⁾

子どもが読んだ本の内容を、一つの小箱にまとめて紹介するツール。登場人物の説明書きを付いたり、タイトル、著者、自分の意見を箱の裏に記載したりする。小箱という目に見える形に表す点の特徴。子どもが自ら選んだ本を対象とすることが重要である。作る手順としては、まず主要な登場人物をあげる。続いて子どもの発達段階に応じて、それぞれの解説を書く。これは主に低学年向きであると考えているが、上の学年にも対応できる。この箱を使って他の子どもたちに紹介する。さらっと読むのではなく、きちんと読まない箱は作れない。「読むプロセス」が、「PISA スーツケース」のまさに要である。

②「緋色の糸」

テキストに記述された出来事をカードに書き出し、出来事の順に赤い毛糸に洗濯ばさみでつなげていくツール。テキストを自分の言葉で要約することがねらいである。毛糸の赤はドイツでは論理の象徴である。テキストを理解し論理的に順序立ててまとめるものである。子どもがまとめ

られないときには、どこが重要であるかに目を向けさせたり、見出しを付けさせたりするといった支援を行う。

③「読書ロール」

資料4-1のような解説と、資料4-2のような課題例が提示されている。資料4-2の課題は物語文を読む場合のものであるが、説明的文章を読む場合の課題も別に示されている。

資料4-1「読書ロール」の内容

読書ロール die Leserolle

読書ロールは、(中略) 読者が一定の期間に読んだ本の記録箱でもあります。子どもたちは自分の興味に応じて、読みたい本(子ども向け小説や解説本)を選びます。読書と並行して、もしくは読書の後で子どもたちは課題の中から選択した必須・選択課題の答えを読書ロールの記録用紙に記録していきます。読書ロールの外側には読んだ本に応じて絵やデザインを加えて、誰もがその内容が見たくなるような形に仕上げます。(中略) 読書ロールが完成したら、子どもたちはクラスで結果を発表します。セロテープでつなぎ合わせた読書に関する課題の答えが巻物になっているのを見ると、子どもたちの意欲がさらに掻き立てられます。

資料4-2 「読書ロール」の課題の具体例

■ 必須課題

- 計画表を作成する
- 読書の巻物の外側をデザイン(著者、題名、出版社、子どもの名を表記)する
- 本の登場人物や主要な物を関連図に描く
- (本に対する)評価表を記入する (以下略)

■ 選択課題

- 主要登場人物の概要をまとめたリストを作成する
- 特に重要な登場人物の人相書きを作成する
- 本のABCリスト(登場人物や事物をアルファベット順に並べたリスト)を作成する
- 本の中のどの登場人物になりたいか、またなぜなのかを書く (以下略)

■ 君の読書の巻物はこうしてできあがる

- 1 まず、君が読みたいと思う本を探す。
- 2 読書中、および読書後に課題に取り組む。リストから、場合によっては君自身が考え出して5つの必須課題と少なくとも5つの選択課題に取り組む。
- 3 巻物に仕上げていく作業は、長期的な積み重ねによるもの。自分の作業計画表を作成し、うまく時間配分しよう(必須課題)。計画表通りに進んでいるかどうか常にチェックしよう。
- 4 巻物の外装は本に合うように考えよう。さらに、題名、著者名、出版社名、君の名前も入れよう(必須課題)。(以下略)

これらのツールは、いずれも読書という行為を表現と結び付け、目に見える形にしている点に大きな特徴がある。本を選んで読み、自分の考えをまとめ、発信し交流するというより大きな読書のプロセスを提示しているのである。子どもの読解力を育成する上では単一のテキストを精読するだけでなく、このような読書活動を取り入れた学習指導の開発が不可欠である。我が国の国語科の授業改善を進める上で、大きなヒントになるものと考えられる。

④ベルリン・ブランデンブルク州立学校メディア研究所における現在の開発状況

「読むプロセス」について、以下のように現在も開発が進められていることが分かった。

現在の読書活動ツールの開発状況

○本の解説書

低学年向けのツール。本を選んで読む。読み終わったら、本の内容に関する3つの質問を書き出す。(例)怪物の本について、「吸血鬼の歯はどうしてとがっているの?」、答「人間の首をしっかりとめるように。」作成したものを元の本に挟んでおく。後にその本を借りた子どもが、読む際の参考にすることができる。

○本のショーウィンドウ

本のタイトルや作者、子ども自身の名前を書き、本の中で一番気に入った場面を描いてショーウィンドウの形にするもの。訪問調査当日に見た作品例の場合、本の書き出しと終わりの文章を書き写している。また、読んだ感想を記述する。書き方は学年に応じて難易度に差を付けている。最後に、自分自身で読んだのか、読んでもらったのか、読み聞かせを聞いたのかをマークする。高学年では、ショーウィンドウの場面を下に解説している。

○回転図書館

子どもたち一人一人が作成。読んだ本のタイトル、出版社、主要登場人物、本の舞台、テーマ、本に対する自分の評価(5つ星)などを、円盤に記載。小学校段階で必要な文学的文章の読みの基本要素を網羅するようにしている。本を読む度に円盤を作成し、重ねていくことによって、自分の読んだ本の履歴を確かめることができる。2000年のPISA読解力調査の時点では、ドイツの教師は、子どもたちはどのような本を読んでいるのか把握していなかった。そのため、授業外で子どもたちが読んだ本を授業に利用することはできなかった。回転図書館により、授業に活用できるようになった。

○本の劇場

子どもが自分で選んで読んだ本の、一番気に入ったシーンを劇場のように描く。登場人物についても描く。読んだ感想なども記載する。課題としては、選んだ場面を対話形式のシナリオに書き換える。人形劇にして友達の前で演じ、自己評価したり感想を言ったりする。

4 ベルリン市の基礎学校⁽¹⁰⁾における読み方実践ボックスの活用状況

2007年のベルリン調査においては、基礎学校2校を訪問し、読み方実践ボックスを活用したドイツ語の授業を参観した⁽¹¹⁾。

(1) 第3学年・ドイツ語授業における「読書ロール」を活用した学習指導の実際⁽¹²⁾

①視察結果

ベテランの女性教師による指導。1年生から持ち上がりの学級である。子どもたちはこれまでも「読書ロール作り」の学習を経験している。今回の学習は3年生になって初めて取り組むもので、学級全体で2冊分の読書ロールを共同制作するというものである。

まず『私の大好きな動物』『海賊の話』の2冊から1冊を選んで読む。それぞれの本には、短いお話がいくつか載せられている(『私の大好きな動物』では「飛びたい鳥」「ちっとも危なくない

鮫」などの文章を掲載)。子どもは本の中で一番気に入ったお話を選んで読む。その後、なぜ気に入ったかという理由を書く。本の挿絵はコピーして子どもに配布する。

前時は自分が選んだお話を要約した。書いた要約文は、家で両親にも読んでもらっている。本時はそれを清書している。子どもが選んで読んだ本のタイトルと要約文、一番印象に残る場面の挿絵をまとめて巻紙に貼り付ける。そのお話を読んだことのない子どもが要約文を読んで、どんなお話かを知ることができるようにする。教師は個別指導を重点的に行う。

次時以降は、グループに分かれて読書ロールを使いながら子どもが他の子どもたちに読み聞かせを行う。テキストは寄付されたもので教材室に1学級の児童数分をそろえている。

②考察

まず、今回の視察によって、読み方実践ボックスが基礎学校において実際に活用されていることを確認することができた。聞き取り調査では、ベルリン市内では広く普及しており、ドイツ語の授業でよく用いられていることが明らかになった。

指導に当たっては、「PISA スーツケース」の開発の考え方にもあるように、「子ども自身が本を選んで読む」という過程を重視していることが分かる。本授業のように共通テキストを用いる場合でも、その中で自分の選んだお話を紹介するという学習場面を構想している。

また、文章を要約する場合も、ロールに貼り付けて友達に紹介するという目的性を明確にしており、子どもの主体的な読むことの学習を実現している。

なお授業者は、読み方実践ボックスにある「読書ロール」の基本的な使い方を子どもの実態に応じて応用し、新たな指導方法を創造している。読み方実践ボックスが単なる教材集ではなく、授業改善を促す手がかりを与えるものとして機能していることがうかがわれる。

日本版開発に向けての課題としては、次の点があげられる。

- ・視察した第3学年までに何度か繰り返して活用しているとのことであったが、学年に応じて必須課題や選択課題を変えていく必要がある。
- ・教科書教材以外の共通テキストを用いる場合は、テキストを学級の児童数分そろえるといった物的な条件を考慮する必要がある。

(2) 第4学年・ドイツ語授業における「読む手順」を活用した学習指導の実例⁽¹³⁾

①視察結果

子ども一人一人が「読む手順」のカードをもって学習している。学習の進度は一人一人異なり、各々読む学習を進めている。読む前に内容を推測した5つのキーワードなどをノートに記載している。

テキストは亀についての説明文。難語句を多く含む文章で、かなり厚い本に収められている。教師は、子どもの実態に応じて語句の意味を記載したヒントシートを複数種類準備しており、個別指導を重点的に行っている。このような方法により、個人差に対応した指導を行っている。

授業終了後、校長及び校内研究の中核教員である Dr. Richter からの聞き取りを行った。その内容は以下の通りである。

ドイツでは1990年代に授業スタイルに変革が生じた。一斉に教科書を読むスタイルから、読書活動を積極的に取り入れ、子ども自身が読む本を決めるということを重視するようになった。この背景には、子どもの変化がある。テレビの影響で本を全く読まない子どもが出てきたのである。このような状況に対応するために、授業を変える必要が出てきた。

読み方実践ボックスは急に生まれたものではなく、このような状況に対応するために実践された様々なアイデアを集約し、具体化し、オリジナルなものとして作られたものである。シュパンダウ区の国語の専門家会議のメンバーが各校を巡回し、8つの下位項目の活用方法について説明するというシステムをとっている。本校でも今日の授業以外にも読書ロールなど、読み方実践ボックスを使っており、授業づくりに有効に機能している。

②考察

子どもたちは「読む手順」のカードを手に、慣れた様子で学習を進めており、日常的にこの学習スタイルをとっていることがわかった。同じスタイルで繰り返し学習することで、子どもたちは独力でテキストを読むことができるようになっていた。その分授業者は、子どもの個々の能力に応じた支援を行うことができていた。

今回の聞き取りで、「PISA スーツケース」は、直接には2000年のPISA読解力調査を契機として開発されたが、そこにはドイツの子どもたちの変化に対応すべく授業改善を図ってきたという布石があることや、普及のためのシステムも存在することが明らかとなった。

日本版開発に向けての課題としては、次の点があげられる。

- ・学年の発達段階に応じた手順を明確にする必要がある。
- ・読む文章の種類によって、用いる手順の具体的内容は異なる場合が出てくる。「読書ロール」のように、説明的文章と物語などといったように、文章の種類に応じた読み方を意識できるような工夫も必要であろう。
- ・日本版の作成後、いかに普及するかが課題である。

5 日本版「PISA スーツケース」の開発に向けて

(1) 「PISA スーツケース」と小学校国語科の接点

日本版の開発に当たっては、「PISA スーツケース」の特徴を生かしつつ、我が国の国語科の教育課程に適合させいく必要がある。より具体的には、学習指導要領の「C 読むこと」の領域を中心とした目標や内容、言語活動等との関連を検討する必要がある。

研究所における聞き取りでは、「PISA スーツケース」もやはり、ベルリンの学習指導要領との密接な関連性をもたせて開発されたとのことであった。

「PISA スーツケース」の特徴は、「読解力」の概念解説を含めて、「読解」を幅広くとらえた上で、多様な側面からその育成を図ろうとしている点にある。これは我が国の国語科の、平成10年版学習指導要領改訂の際の「文学的文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改める」という基本方針とも合致すると考えられる。また、2008年3月に公示された小学校学習指導要領・国語との関連を見ると、「読む手順」は、「音読に関する指導事項」と「説明的な文章の解釈に関する指導事項」及び「文学的文章の解釈に関する指導事項」、「自分の考えの形成及び交流に関する指導事項」⁽¹⁴⁾の学習をより具体化して小刻みに示したものに相当すると考えられる。

「読むプロセス」における「読書の小箱」や「読書ロール」は、言語活動例に相当するものといえよう。「読むプロセス」は、今回の学習指導要領・国語の改訂の要点の一つである「学習過程の明確化」⁽¹⁵⁾と同様、読む能力を、本を選んで読み、解釈し、自分の考えを発信し、交流するといった一連の過程としてとらえている。「読書の小箱」「読書ロール」及びこれらのバリエーションとして開発されている「本のショーウィンドウ」や「本の劇場」などは、このような過程を具体的な形とし

て示している点に特徴がある。目に見える形にすることは、指導の理念と具体的方法の普及という点できわめて大きな効果をもつ。我が国の国語科の授業改善に向けて大きな示唆を与えるものと思われる。

(2) 具体的な開発の方向性

「PISAスーツケース」には、具体的で多様な読解力育成の方途が示されている。しかし基礎学校における「読書ロール作り」の授業で見られたように、教師がそれらを忠実にこなすだけでなく、子どもの実態等に応じて活用の仕方を変えていくなど創造的で弾力的な使い方を導き出すものであることが望まれる。すなわち、単に便利な指導マニュアルや教材のアイデア集というだけではなく、国語科のねらいに応じた授業改善を促進するものとなることが求められる。

日本版の開発に当たっては、まず学年の発達段階や国語科の学年目標・指導事項に応じたグレード設定が必要になると考えられる。その際、「読書の小箱」は主に小学校低学年から中学年向き、「読書ロール」は主に小学校中学年から高学年向きなど、ツールの特徴を生かした学年設定が有効であろう。

また、資料2-1及び資料4-1に示したような、教師向けの解説を作成し、言語活動を通してどのような読解力を育成しようとするのかを説明することも必要であろう。

さらに我が国の場合、教師の資質向上のための研修方法として授業研究がある。授業研究会等では、学習指導案をもとに授業の在り方を検討することが基本となる。その際、例えば読むプロセスに提示されたような読書活動を取り入れた授業の学習指導案を作成して提示することなどによって、指導過程全体のイメージも伝わりやすくなるものと思われる。

なお本論は、科学研究費補助金による、基盤研究(C)課題番号19530776「日本版『PISA スーツケース』の開発」の研究成果の一部である。

注

- (1) 2007年1月1日より組織統合し「ベルリン・ブランデンブルク州立学校・メディア研究所」(Landesinstitut für Schule und Medien Berlin-Brandenburg)となり、現在はベルリン市に隣接するルードビクスフェルデ市に移転している。
- (2) 水戸部修治(2008)「日本版『PISA スーツケース』の開発に関する基礎的研究」『山形大学紀要(教育科学)』第14巻第3号、pp.99-109
- (3) 訪問調査に当たっては、在独の通訳者、土本時江氏の協力を得た。
- (4) 翻訳に当たっては、株式会社ビーコスの協力を得た。
- (5) 注(1)の研究所の開発を担当した所員は、聞き取りの際、本来の開発趣旨からいえば「PISA スーツケース」という呼び方がふさわしいと述べていた。そこで本論においても、製品の特徴を記述する場合は「読み方実践ボックス」とし、それ以外は「PISA スーツケース」という呼称を用いることとする。なお、読み方実践ボックスは、2008年12月現在、199ユーロで販売されている。
- (6) 注(2)の論文を参照願いたい。
- (7) 教育課程審議会答申(1998)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について』
- (8) 開発担当者は、Ms. Irene Hoppe, Ms. Erna Hattendorfである。2氏には、2007年12月3日の研究所訪問の際、開発経緯について詳細な説明をいただいた。

- (9) 注(2)の論文には日本版の試作品の写真を掲載している。参照願いたい。
- (10) ドイツ連邦の基礎学校の多くは4年制であるが、ベルリンでは6年制をとっている。
- (11) 訪問したのは次の2校である。
- ①Grundschule am Tegelschen Ort (所在地 Berlin-Reinickendorf Gerlindeweg 11-23 13505 Berlin)
- ②Grundschule am Eichenwald (所在地 Berlin-Spandau Gaismannshofer Weg 2 13587 Berlin)
- (12) ①視察校：Grundschule am Tegelschen Ort ②期日：2007年12月4日(火) ③対応者：Backhaus 校長、学級担任教師 他
- (13) ①視察校：Grundschule am Eichenwald ②期日：2007年12月5日(水) ③対応者：Schmidt-Eichstatt 校長、Dr.Richter、学級担任教師 他
- (14) 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説国語編』pp. 19-22
- (15) 同掲書 p7

(受理日：平成21年3月4日)